

死亡者のいる家庭のインタビューを通じた

オミクロン株流行中の死亡分析

Exploring the cause of death structure during Omicron variant epidemic
surveying households with a deceased member

西浦博 (京都大学)

Hiroshi Nishiura (Kyoto University)

nishiura.hiroshi.5r@kyoto-u.ac.jp

はじめに

新型コロナウイルス感染症のパンデミック中に新型コロナウイルス感染症に伴う死亡とそれ以外の死因に伴う死亡のそれぞれがどのように変化したかを理解することはパンデミックの疫学的インパクトを十分に定量化する上で欠かせないことである。これまでの日本では 2020-21 年の間は抑制政策によって新型コロナウイルス感染症の感染者総数を他の先進国と比較して低いレベルで維持してきた。しかし、2021 年末から開始したオミクロン株 (PANGO 系統で B.1.1.529 系統) による COVID-19 流行以降、日本では感染者数が著増し、また、流行対策に前向きでなくなった。

これまでよりも COVID-19 による死亡者数が増加したが、報告される死亡者の中に間接的死因による死亡者が増えたことが報告されてきた。本研究の目的は、COVID-19 パンデミック中の死亡について家族構成員に横断調査を実施し、死亡メカニズムについて把握することである。

方法

横断的調査による死亡メカニズムの実態調査に取り組んだ。調査時点(2022年2月)までに、同居家族や2親等以内の親族(祖父祖母、親、子、兄弟姉妹)と配偶者の中で、少なくとも1人が死亡した家庭を対象に、その詳細について電子的調査を実施した。ノンランダムでないサンプルを自発的に研究参画するよう招待し、そのスクリーニング条件として、少なくとも死因について知っている者を選定条件とした。

調査の際、死亡した親族のうち、死亡診断書の死因はもちろんのこと、死亡年月、基礎疾患、施設入所の有無、新型コロナウイルス感染症の罹患の有無、予防接種歴、死亡場所、死亡する直前の受診歴や救急搬送歴、搬送時間等に関する情報を収集した。新型コロナウイルス感染症の罹患歴や予防接種歴と死亡の関係、および、医療逼迫や受診控えを反映する要素と死亡リスクとの関係について統計学的に検討を行った。

結果

全ての死亡した参加者のうち、死因は悪性新生物 25.1%、心疾患 10.3%、脳血管疾患 5.2%、肺炎 10.9%、老衰 33.0%、新型コロナウイルス感染症 3.5%であった。その中で、直接的な死因に関わらないとした場合に、新型コロナウイルス感染症の罹患歴を 13.0%の者に認めた。

死亡の半分以上が 2021 年 12 月以降に発生しており、新型コロナウイルスに直接起因すると思われる呼吸や全身状態の悪化で入院した者が 47.0%であった。死亡届の死因について 6.6%の者は新型コロナウイルス感染症の記載があった。病院・医療機関での死亡が 62.6%、高齢者福祉施設での死亡が 18.1%、自宅での死亡が 18.7%であった。

考察

大会当日には、間接死因や関連死のメカニズムについて考察可能なよう、上記の死因構造を紐解いた結果を拡充して報告する予定である。